

物語るボーダー装飾の誘惑

-Thielman Kerver (1497) と Philippe Pigouchet (1504) の時禱書をめぐって-

い て あらた
井出 新
(文学部教授)

中世からルネサンスにかけて、日々の私的な祈りの時間と勤行で用いる時禱書は、人々の日常生活の重要な一部だった。写本の時禱書は14世紀から数多く制作され、聖務日課書を基に編纂された祈禱文とともに、美しい挿絵や縁飾りが描き込まれた。写本は高価だったため、所有できたのは富裕層だけであったが、15世紀中庸に活版印刷が登場すると、パリやルーアンを中心に、庶民でも入手可能な印刷時禱書が刊行され始める。これが爆発的な人気を呼び、15世紀末から16世紀にかけて、書籍商たちは競い合いながら凝った挿絵やボーダー装飾を彫版師に制作させ、独自のレイアウトで顧客を得ようとした。時禱書の言わば「ハウス・スタイル」の誕生である。

出版社の個性が出るのは聖書物語をコマ版画で描くボーダー装飾だ。例えばPhilippe Pigouchet (1498) [120X@1351@1] 及び (1504) [120X@1385@1] はコマを三段組みにして、聖母マリアとイエスの生涯を上から下へ時系列順に並べ、それぞれのコマに解説を付けた。Pigouchetが出版したいくつかの時禱書を比較検討すると、初期刊本にはコマの解説が見られないため、競争相手の創意工夫を参考にしながら、試行錯誤を積み重ねていったことがわかる。

勿論、すべての書籍商が聖書物語のボーダー装飾を採用したわけではない。Gillet Hardouyn [120X@1158@1] は、フルページで聖母マリアとキリストの生涯の版画を組み、それを美しく彩色して写本仕立てにするのが売りで、凝った縁飾りにさほど興味を示さない。縁飾りを施す場合は、もっぱら黙示録の幻想的な場面を題材にしたコマ版画を二段組みにするのを好む。しかし多くの書籍商が聖書物語のボーダー装飾を取り入れたという事実は、印刷時禱書の購買層におけるその人気の高さを示すものだ。

1497年に時禱書出版に参入したのがドイツのコブレンツ出身Thielman Kerverである。パリのサン・

ミッシェル橋に店を構えた彼は、挿絵とボーダー装飾の彫版を、当時人気の職人に依頼した。サント・シャペルの薔薇窓制作で黙示録のデザインを担当した職人だが、名前は不明である。その甲斐あってか、Kerverのローマ式典礼時禱書は1497年だけで少なくとも三版を重ね、慶應義塾図書館が所蔵するKerver時禱書 [120X@1384@1] は、同年12月20日に出版された最初期の刊本である。この版を所蔵する図書館は現在5箇所ほどで、そのいずれも獣皮に印刷されているが、慶應の時禱書は紙が使われた極めて稀有な個体だ。紙媒体の時禱書は大抵、しみや破れなどのダメージを受けてしまうものだが、この時禱書は当初の状態をほぼそのままに保っている。



図版1

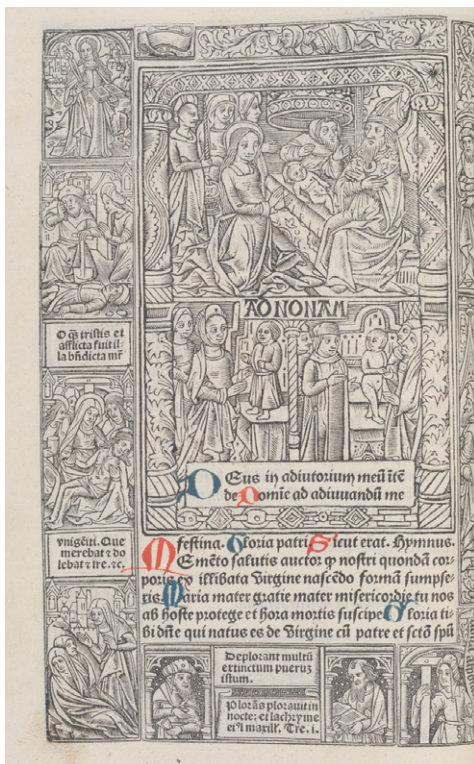
保存状態の良さは、この書物の来歴と関係がある。この時禱書にはイギリスの有名な愛書家Henry Huth (1815-1878) の蔵書票が付されている。欠損

がなく状態の良い古書しか購入しなかったHuthの凄まじいコレクションは、彼の死後に売却されたが、その時のカタログによれば、この時禱書はイギリスの蒐集家Felix Slade (1788-1868) の美装本コレクションの一冊だったという。見るからにユニークな装丁(図版1)は、その輝かしい来歴を雄弁に物語っている。SladeやHuthの蔵書の殆どは大英図書館をはじめ、名だたる図書館に収められたが、この一冊は個人の手へ渡った後、ミラノの書店を経由して、2021年に慶應義塾図書館に収められた。

Kerverが採用したのは、時系列順ではなく予型論的なボーダー装飾である。この時禱書の一ページを覗いてみよう。図版2のボーダーでは中央にイエスの亡骸を抱える悲しみの聖母が描かれ、それを説明するための聖歌の引用が図版を上と下から挟んでいる。一番上のコマ版画では旧約聖書「哀歌」神殿の破壊を嘆くエルサレムが描かれ、一番下のコマでは、「ルツ記」で夫と息子の死を嘆くナオミが描かれる。その解説はページ底辺の預言者二人に挟まれた上下のフレームにそれぞれ配置されている。Kerverのページ構成は、新約聖書のイエスの死と聖母の悲しみを旧約聖書の記事(神殿破壊とナオミの悲しみ)

にダブらせて黙想できるよう配慮されているのだ。

こうしたボーダー装飾についてKerverは先輩同業者であるJean DupréやAnthoine Vérardの影響を受けていた。彼らこそ予型論的なボーダー装飾の先駆者であったし、イエスの奉献を描いた図版2のページ中央に見られるように、二段組みの大きなコマ版画をボーダー装飾の中に嵌め込むレイアウトも彼らに倣ったものだった。とは言え、予型論的なボーダー装飾と上下のコマ版画を解説するページ底辺の二つのキャプションという整然としたページ構成は、明らかにKerver自身の考案によるものである。そしてこのレイアウトは、同じ頃ベネチアで時禱書の刊行を行っていたイタリアの書籍商、さらには16世紀後半に祈禱書を制作したイギリスの書籍商にも、大きな影響を与えたことがわかっている。また慶應義塾図書館が所蔵するもう一冊のKerverの印刷時禱書(1501) [120X@1350@1]と比較してみると(図版3), Kerverが先輩同業者の影響を受けながらも、二段組みの大きなコマ版画から一枚の大きな版画へと(おそらく読者の嗜好に合わせて)ページ構成を変化させていく様子が手に取るように分かる。



図版2



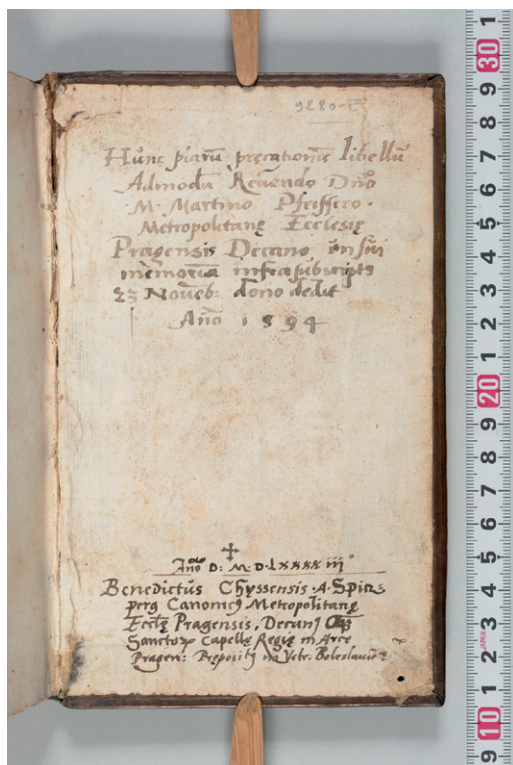
図版3

15世紀から16世紀にかけての印刷時禱書が慶應義塾図書館に十数冊所蔵されているおかげで、こうした比較検討が可能となることは言うまでもないが、さらに研究の可能性を広げてくれるのは、時禱書に残された持ち主の痕跡である。中世からルネサンス期の書物を研究・教育する者にとって、書物が当時の読者にどのように読まれ、受容されたかは、興味の尽きない研究課題だ。勿論、そうした受容を跡づける史料は極めて少ない。しかし書物の所有者が余白に加えた書き込みや挿入した手書きノートなどは、当時の読書行為に関する重要な手懸かりとなり得る。

そういう意味で、1504年10月27日にパリで出版されたPigouchetの時禱書 [120X@1385@1] は極めて重要な歴史史料だ。Kerver (1497) の前掲書と同様、このPigouchetもミラノの書店を経由して慶應義塾大学所蔵となったが、この版は世界でも極めて稀であり、現在ケンブリッジ大学の所蔵が一件確認できるのみだ。特筆すべきは、この時禱書の来歴である。

表紙や見返し（図版4）の書き込みからわかるのは、この書物がパリで出版された後、Thomas Poleniusなる人物の蔵書としてボヘミア（現在のチェコ）に渡り、その後1593年にプラハの大司教管区の大聖堂参事会員Benedictus Chyssensis、1594年11月に司教代理Martinus Pfeifferの蔵書となったことである。しかも巻末に6ページにもわたる聖歌や祈禱文が整った筆跡で付け加えられ（図版5）、この時禱書がいかに愛おしく大切にプラハの聖職者たちによって使われていたかを窺わせる。こうしてこの時禱書は他の印刷本にはない「個性」を帯びているのだ。

それにしても、この美しい時禱書を用いるプラハの聖職者たちは、祈りと黙想に専念できたのだろうか。むしろ気の向いたときに時折、眺めるだけで満足していたのかもしれない。なぜなら一旦この書物を開けば、挿絵や聖書物語のボーダー装飾の誘惑に負け、動行そっちのけで密かに版面を楽しんでしまうことになるからだ—現代の私たちと同じように。



図版4



図版5